

『御抄』の『正法眼蔵』解釈

—疑問詞と疑問の助詞について—

一 はじめに

『駒沢大学仏教学部研究紀要』第三四号では、「『御抄』の『正法眼蔵』解釈——否定的表現について——」と題して、『御抄』（『正法眼蔵抄』）が『正法眼蔵』中の否定的表現の幾つかを、単なる否定的意味を表わす語とは解さないで、「一方を証するときには一方はくらし」の「くらし」の語の働きをするものとして捉えていることを、ことばの持つ本来の意味や表現の上から四つのグループに分けて指摘し、なぜそのようなことが言い得るのかを論じた。

この小稿は、前稿を承けて「『御抄』の『正法眼蔵』解釈」と題したのであるが、副題にあるように、『正法眼蔵』中の疑問詞や疑問の助詞を、『御抄』がどのように解釈しているのかを考察せんとするものである。『御抄』は、疑問詞や疑問の助詞を、単なる疑問を表わすことばとは捉えない場合が

『御抄』の『正法眼蔵』解釈（伊藤）

伊藤 秀 憲

多々ある。勿論すべてがではなく、『御抄』においても疑問を表わすことばとして解されている箇所もあるが、今はそのような例は考察の対象とはしない。それでは、『正法眼蔵』中に用いられている疑問詞や疑問の助詞で、『御抄』が単なる疑問を表わすことばとは解していないものにはどのようなものがあり、それらを如何なる意味に解釈しているのだろうか。

以下の引用文中、『正法眼蔵』は大久保道舟編『古本校定正法眼蔵』に、『正法眼蔵抄』は『曹洞宗全書』註解一・二によった。

二 疑問詞と疑問の助詞の用例

疑問を表わすことばには、疑問詞と疑問の助詞とがある。疑問詞は、そのことば自体に疑問の意味を含んでいるが、疑問の助詞は、文末に附されることによつて疑問文を作る働きをすることばである。

先ず疑問詞であるが、『御抄』が単なる疑問を表わすことばとしては解釈していないものに、次に挙げるようなことばがある。

甚麼 什麼 作麼 作麼生 何 云何 如何

この他に、平仮名で表わされたものもある。

なに（什麼） いづれ（什麼） いかなるか（如何） いかにあらんか（如何） たれか（誰）

次に疑問の助詞であるが、『御抄』が疑問を表わす助詞とは解していないものに、

……也未 ……也無

がある。また、疑問を表わす日本語の助詞の「や」や「か」も、

……とやせん、……とやせん、……や、……や、……か、……か、……か、……

というように、繰り返し用いられる場合に、同様に解されている。

以上が、表現の上では疑問を表わしてはいるが、それを単に疑問を表わしたものは『御抄』が解釈していない場合のことばである。

次に、その一一を取上げ、その語の本来の意味に対して、『御抄』が如何なる解釈をしているのかを、用例を挙げることによって明らかにしていきたい。但し、平仮名で書かれた

疑問詞もあるが、括弧内に示したように、漢語に当てはめることができるから、これらのことばのみを別扱いすることなく、それぞれ相当することばの項があれば、その箇所と一緒に取上げることにする。（紙幅の関係上、すべての用例を挙げることはできないから、主なものみに止める）

(一) 疑問詞の用例

(1) 甚麼・什麼

「甚麼」も「什麼」も、「なんの」「どんな」「どんなもの」「いづれの」という、同じ意味を持つ疑問詞である。この用例を挙げれば、次のようである。

(a) 円月相といふ、這裏是甚麼处在、説細説麤月なり。（仏性 二三頁）

所詮此心地八月ト談スル時ハ法界ノ内外皆月也、非レ月ル一法不レ可有故、是ハ是イカナル所ヲ、サイト説キ麤ト説クト云ハ、細モ月麤モ月ナリ、非レ月処ナキ道理ヲ説詞也、円月相義同之、（抄 一・六七頁上と下）

(b) (前略) 大師隔レ總問云、「闍梨念底、是什麼経。」僧対曰、「維摩経。」師云、「不レ問レ爾維摩経。念底是什麼経。」此僧從レ此得入。（看経 二七二頁）

先此大師ノ問ハ、今ノ看経ヲ念ト云也、此念無レ際限レハ、此以ニ道理ニ念底是什麼経トハ被レ問ナリ、一経ヲ指テ不審ノ儀不レ可有、何レノ経ニモアタルヘキ也、法華華嚴大集方等経、乃至今ノ維摩経総アタラスト云事不レ可有、即不レ中経ナルヘシ、ユヘニ汝カヨム経ハ、尽界経ナラスト云事ナキ道理也ト、喩ハ

被示也、此時ハ祖師モ今ノ僧モ皆念経ナルヘシ、(抄 一・六
二六頁下)

(c) しばらく雲門にとふ、なんぢなに(什麼)⁽²⁾をよんでか人人とす
る、なに(什麼)をよんでか光明とする。(光明 一一九頁)

実ニモ、是ハ何ヲヨムテ人人トシ、光明トスヘキソ、是什麼物
恚麼来ノ道理ナリ、ナニモアタルヘシ、説似一物即不中也、(抄
一・三三九頁上)

(d) 大証国師曰、牆壁瓦礫、是古仏心。いまの牆壁瓦礫、いづれ
(什麼)⁽³⁾のところにかあると參詳看あるべし。是什麼物恚麼現成
と問取すべし。(発無上心 五二五頁)

イツレノ所ニアルト參詳看アルヘシト云ハ、何ノ所モ皆牆壁瓦
礫ニアラサル所ナキ道理ヲ例如此イハルルナリ、以ニ此理ニは何
麼物恚麼現成ト問取スヘシト云ナリ、コノ是什麼物恚麼来ノ
詞モ、不審シタル非問、只法ノ理カ是什麼物恚麼来ノ道理ナ
ルナリ、今ノ何ノ所ニカアルト云詞、只同シキユヘニ如此問取
スヘシト云也、(発菩提心抄 二・四〇九頁下〜四一〇頁上)

(e) 又坐仏の殺仏なるは、有什麼形段と參究すべし、(坐禅箴 九五
頁)

此有ニ什麼形段トアル詞、ヤカテ坐仏ナルヘシ、殺仏ナルヘ
シ、思量ナルヘキカ、不思量ナルヘキカ、非思量ナルヘキカ、
坐仏ナルヘキカ、殺仏ナルヘキカ、此道理カ有ニ什麼形段ト云
ハルル也、何義ニモアタルヘキ形段也、(抄 一・二五三頁)

(f) 雲居山弘覚大師、參高祖洞山。山問、「闍梨名、什麼。」雲居曰、「道
膺。」(後略) (仏向上事 二二七頁)

此問答審細スヘシ、闍梨名什麼ノ詞、只普通ニモ師資ノアハ
『御抄』の『正法眼蔵』解釈(伊藤)

ヒ、争始テ名字ノ不審アルヘキ、実ニモ此闍梨ノ名ナニトアル
ヘキソ、仏性ナルヘキカ、法性ナルヘキカ、三昧タラニナルヘキ
カ、真如実相ナルヘキカ、ユヘニ、闍梨什麼ト云ハルルカ、是什麼物
恚麼来ノ詞ノ理是ナリ、(仏向上抄 一・五五四頁上)

(g) 曩祖の慈誨するところは、拳頭有拳頭師、眼睛有眼睛師なり。し
かあれども、しばらく曩祖に拜問すべし、争怪得和尚はなきにあ
らず、いぶかし、和尚是什麼師。(看経 二六九頁)

和尚是什麼師ハ、此和尚当体、経ニテモ論ニテモ拳頭ニテモ眼
睛ニテモ、何ニモアルヘキ道理ヲ、如此被述常事也、(抄
六一九頁上)

どの用例も、「甚(什)麼」が疑問を表わすことばであると
は解釈していない。ではどのように理解しているのであるう
か。

(a) では、「月ト談スル時ハ法界ノ内外月也、非月ル一法
不可有故」とあり、月のみであつて月に相對するものにな
いことが示され、この立場より、「是ハ是イカナル所ヲ、サ
イト説キ麤ト説クト云ハ、細モ月麤モ月ナリ、非月処ナキ
道理ヲ説詞也」と釈せられる。「甚麼処在」即ち「イカナル
所ヲ」という疑問のことばを、「いかなる所も」の意味に解
して、いかなる所も月である(法界ノ内外皆月也)という、月
の一法究尽なることを表わさんとしていると言える。(b) では、
「什麼経」を「何レノ経ニモアタルヘキ也」として、法華・
華嚴等のいかなる経にもあたるものであつて、それは尽界経

——いかなるも経——ということを表わしている。(c)では、「なにをよんでか人人とする、なにをよんでか光明とする」を、「ナニモアタルヘシ」としている。「なに」を「なんでも」の意味に解し、何んでも皆人人であり光明であるというのである。(d)では、「牆壁瓦礫、いづれのところにかある」を、「何ノ所モ皆牆壁瓦礫ニアラサル所ナキ道理」、即ちいかなる所も皆牆壁瓦礫であるという意味に解釈している。(e)では、「坐仏の殺仏なるは、有什麼形段」というのを、「何義ニモアタルヘキ形段也」として、坐仏にも、殺仏にも、思量にも、不思議にも、非思量にもあたるべきことが説かれている。(f)では、闍梨の名が仏性にも、法性にも、三昧にも、陀羅尼にも、真如実相にもあたることを「什麼」という語が示しており、(g)では、「什麼師」を、和尚の当体が経・論・挙頭・眼睛にもあるということを示す語として解している。

このように、「甚(什)麼」は特定のものを示すのではなく、「いかなるも」ということを示す語として解釈されている。ただ(a)と(d)は、月や経等の一法に、いかなるものも撰されるという表現のときに用いられているのに対して、(e)と(g)はその逆に、一法がいかなるものにも展開されるという表現のときに用いられている点が異なるが、これは、表現の上での相違であって、どちらも一法究尽なることを表わしており内容の相違ではない。また後述するが、(c)(d)(f)では、「什麼」とは

「是什麼物恁麼来」の道理であり、更に(c)では、「説似一物即不中」ということであると述べている点には注意しなくてはならない。

(2) 作麼・作麼生

「作麼」も「作麼生」(生は助詞)も「どのように」「どうして」の意味の疑問詞である。この語を含んだ『正法眼蔵』の本文を、『御抄』は次のように解釈している。

(a)雲巖無住大師、問道吾山修一大師、「大悲菩薩、用許多手眼作麼。」道吾曰、「如人夜間背手摸_二枕头_一。」(後略)(観音 一六九頁)

是ハ千手ノ身ハ一体ニテ、千手千眼ヲ用テハ、何ノ料ソト不審シタルヤウニキコユ、非_レ爾、此千手千眼ハ眼ハアレトモ、色法ヲモ不_レ見、千手アレトモサクリトラルヘキ物モナシ、全手全眼ナルカユヘニ、仍_二此道理_一カ、作麼トハ、例ノ云ハルル也、(抄 一・三八八頁上)

(b)さらに仏性を道取するに、挖泥滞水なるべきにあらざれども、牆壁瓦礫なり。向上に道取するとき、作麼生ならんかこれ仏性。還委悉麼。三頭八臂。(仏性 三四頁)

作麼生ナラムカコレ仏性ト云フ心地ハ、仏性ヲ道取スル時ハイカナルモ皆仏性也、仏性ナラヌ一塵ノ法アルヘカラスト云也、更非_二不審ノ詞_一、(聞書(抄カ) 一・一一五頁下〜一一六頁上)

(c)この問取は、道取を挙来せり、手眼を挙来せり。いま用許多手眼作麼と道取するに、この功業をちからとして成仏する古仏新仏あるべし。(観音 一七〇頁)

是ハ用作麼ノ詞ヲ如^ニ先云、問取ト不^レ可^ニ心得、作麼ノ詞一切ニ可^レ渡、作麼ノ詞カ、ヤカテ、道取ヲ拳来シ、手眼ヲ拳来スル也、(中略)作麼ノ詞、法性ニモ、仏性ニモ、三昧タラニニモ、諸法ニアタルヘシ、即不^レ中道理也。(抄 一・三九〇頁下)

(d) (前略) 作麼生是換卻底道理。(仏向上事 二二七頁)

又作麼生是換却底ノ道理ト云詞、例事也、イカナル道理ナルトモ難^レ定、又イカナル道理ニテモアル所カ如此イハルル也、

(仏向上抄 一・五五三頁下)

(e) しばらくとふべし、作麼生ならんかこれ不干底道理。速道速道。

(春秋 三三〇頁)

作麼生ノ詞、如^レ例即不^レ中道理也。(抄 二・二四頁下)

(f) 自己に問著すべし、作麼生是苦。(三十七品菩提分法 五〇四頁)

自己ニ問著スヘシ、作麼生是苦トハ、是什麼物恁麼来、説似一物即不^レ中ノ理ナルヘシ、(抄 二・三三八頁下)

「作麼」「作麼生」どちらも、「何ノ料ソト不審シタルヤウニキコユ、非^レ爾」「更非^ニ不審ノ詞」等とあるように、疑問を表わすことばとは解していない。

(a)では、全手全眼ということが「作麼」として表わされているのであるが、全手全眼とは、すべてが手、すべてが眼と、いうことであって、手以外、或は眼以外のものはなにもない、即ち手或は眼の一法究尽を表わしている。(b)は「作麼生ならんかこれ仏性」を、「イカナルモ皆仏性也」の意味にとり、仏性以外になにもない、すべて仏性であるという解釈をしている。(c)では、「作麼ノ詞一切ニ可^レ渡」として、法性・仏

性・三昧・陀羅尼・諸法にもあたると説かれ、(d)では、いかなると定め難いところ、それは換言すれば、いかなるものということになるが、そのような意味に「作麼生」が解されている。このように、やはり「作麼」も「作麼生」も「いかなるも」の意味に取り、一法にいかなるものも撰されている、或は一法がいかなるものにも展開している、という表現がなされている。(e)と(f)は、「説似一物即不中」或は「是什麼物恁麼来」の意味に解しているが、この二つのことばは、先の「什麼」の項にも出て来たし、この後の用例にも出て来て、疑問詞を解釈するにあたり、しばしば用いられている。疑問詞が『御抄』において、どのように理解されているのかを知る上で非常に重要な語であるから、後に言及することにする。

(3) 何

「何」も「なに」という疑問詞であるが、この用例は次のようである。

(a) 盤山宝積禪師云、心月孤円、光吞万象。光非照境、境亦非存。光境俱亡、復は何物。(都機 二〇六頁)

心月孤円ハ全月ナル道理也、(中略)復は何物トハ、光モ境モ共ニ亡シタリトハ、光モ境モ亡シタル姿カ、復は何物トハ云ハルルナリ、是則什物恁麼来ノ道理ナリ、(抄 一・五〇〇頁上)

(b) 尊者とふ、汝が手中なるは、まさに何の所表かある。有何所表を問著にあらずとききて参学すべし。(古鏡 一七六頁)

尊者ニ両手ノ鏡ヲ、何ノ所表ソト被問タリトキユ、但非其儀、何所表カアルノ詞ハ只古鏡ヲ談スル詞也、何ナル所表カアルハ、何ノ所表モアル也、ヤカテ古鏡ナル、所表ニテモアルヘシ、三昧、タラニ、乃至実相等ノ所表ニテモアル所ヲ、有何所表トハイハルル也ト、可ニ心得也、是什麼物恁麼来ノ道理ナルヘシ、(抄 一・四〇六頁下〜四〇七頁上)

(a)では、光も境も亡じた、ただ月のみ、全てが月であるということ(全月)が「何物」と言われる。これは、「何物」を「何物も」の意味に取って、いかなるものも月であるという解釈をしたものと思われる。(b)は「有何所表」を「何ノ所表モアル也」と解釈して、古鏡・三昧・陀羅尼乃至実相等の所表にてもあるとしている。ここにおいてもやはり、「何」という疑問詞を「いかなるもの」の意味に解釈して、一法にいかなるものも撰されていることと、一法がいかなるものにも展開していることが説かれている。

(4) 如何・云何

「如何」も「云何」も「どのようなものが」「いかに」「どうして」という、同じ意味の疑問詞である。この語の用例を次に挙げる。

(a) 国師、因僧問、「如何是古仏心。」師云、「牆壁瓦礫。」(古仏心 七頁)

此如何ノ詞物ヲイカナルカ是ト云ハ、アマタノ物ノアル中ニ、イツレソト云詞ニアタル、是ハ無ニ其義、イカナルモ、古仏心ト

云心也、古仏心ナラヌ一法ナキユヘニ、仍此如何ノ詞ハ、至極古仏心ヲ説詞ナリ、更非ニ不審義ニユヘニ、此如何ノ詞ハコレモ如此、カレモ如此ト云道理也、(抄 一・二一四頁上〜下)

(b) 大寂いはく、如何即是。(坐禅箴 九三頁)

是ハ南嶽ハ坐禅豈得ニ作仏ニ耶トテ、坐禅シテ仏ニ成ヲ被ニ不審ニタル詞ヲ、イカナルカ即是ト、大寂云タル様ニ心得ヌヘシ、非レ爾、努努非ニ不審詞、イカナルモ作仏ト云詞也、作仏ナラヌ道理不レ可有、(抄 一・二四八頁下)

(c) 大宋国福州芙蓉山靈訓禅師、初参歸宗寺至真禅師而問、「如何是仏。」(空華 一一四頁)

芙蓉問、如何是仏、世間ニハイカナルカコレ仏ト説テ、仏ヲ不審スルト心得、此宗門ニハヤカテ以レ問為レ答、イカナルモコレ仏ト云ヘシ、仏ノ面目カクレテ、知見解会ノ不レ及ニヨリテ問ニハアラス、仏ノ面目見成シテ一塵ノ上ニモ、法界ノ上ニモアラハルル也、仏ノ辺際ナキ道得ノ所ヲ、如何是仏ト問、是ステニ知不知ニ渡テ心得ヌヘシ、問トナリ答トナル、コノツカヒヲ知ヘキ也、(聞書 一・三三〇頁上)

(d) このゆゑに、いかなるか(如何)海と問著するは、大海のいまだ人天にしられざるゆゑに、大海を道著するなり。(海印三昧 一〇五頁)

イカナルカ海ト問著スルハ、尽十方界海ト云心地ナリ、(抄 一・二九〇頁上)

(e) 皇帝宣問す、「いかにあらんか(如何)これ仏光なる。」文公無対なり。(光明 一一八頁)

文公無対ト云ハ、イカナラムカ是仏光ト云程ノ無対也、イカナ

ルモ仏光ナルヘキユヘト可ニ心得カ、(聞書 三四三頁上)

(f)あるとき僧きたりて庵主にとふ、「いかにあらんか(如何)^(?)」これ
祖師西来意。」庵主云、「溪深杓柄長。」(道得 三〇三頁)

イカニアラムカコレ祖師西来意ノ詞、例ノ不審ト聞エ、但此西
来意ノ姿、西来意カカルヘシトテ、一法ニサタマリテ、イハル
ヘキ道理アラス、イカナルモ西来意ナルヘシ、一物ニ局量セラ
ルヘキニアラス、(抄 一・六九八頁上)

(g)その功夫は、いかなるか(如何)⁽⁸⁾これ生、いかなるかこれ死、い
かなるかこれ身心、いかなるかこれ与奪、いかなるかこれ任運。

(行仏威儀 五二頁)

イカナルカコレコレト、アマタアケラル、是ハ例ノ非ニ疑義、コ
レコレノ詞ハ、皆コレト云心地ナリ、(抄 一・一六九頁下)

(h) (前略)我当云何而守護。唯願世尊、垂哀示教。」(摩訶般若波
羅蜜 一二頁)

守護ノ道理ヲ云ニ如何可守護ト云、此祖門ノ問答ニノミ、如何
ト問スル詞ノ答話ナル義アルニハアラス、仏在世ヨリ如何ノ
詞、問ト聞ユル所ニ答現前ス、守護ノ様如何ト云ハルルナリ、
コレは何物恁麼来ノ詞是ニ同キナリ、(摩訶般若抄 一・二
一頁上)

これまでと同様に、この二つの疑問詞も疑問を表わすこと
ばとしてではなく、「いかなるも」の意味に解釈されている。

(a)では、「如何是古仏心」を「イカナルモ古仏心ト云心也、
古仏心ナラヌ一法ナキユヘニ」として、すべてが古仏心であ
って、古仏心でないものはないという意味に解している。(b)

『御抄』の『正法眼蔵』解釈(伊藤)

では、「如何即是」を「イカナルモ作仏ト云詞也、作仏ナラ
ヌ道理不可有」として、いかなるも是であるという意味に
取っている。(c)では、「如何是仏」を同様に「イカナルモコ
レ仏」と取り、「此宗門ニハヤカテ以問為答」として、問
が単なる問ではなく、問の中にすでに答が表わされていると
いうことを明確に示している点には注意しなくてはならない。
(d)「いかなるか海」を「尽十方界海」、即ち「いかなるも海」
の意味に、(e)「いかにあらんかこれ仏光」を「イカナルモ仏
光」、(f)「いかにあらんかこれ祖師西来意」を「イカナルモ
西来意」の意味に解釈している。また(g)では、「いかなるか
これ」を「コレコレノ詞ハ、皆コレト云心地ナリ」と釈して
いるが、これは、「皆これ生、皆これ死……」と解すること、
即ち「いかなるも生、いかなるも死……」の意味であること
を示していると言えよう。(h)では、「云何」は問ではなく、
「問ト聞ユル所ニ答現前ス」として、「は何物恁麼来」と
同じであるとしている。『御抄』では、以上のように、「如何、
云何」もこれまでの疑問詞に同じく、「いかなるも」の意味
に解し、同様の用い方をしている。

(5) 誰

「たれ(誰)」も疑問詞ではあるが、『御抄』はそのようには
解釈していない。

たれか(誰)⁽⁹⁾これ主人公なり。(栢樹子 三五〇頁)

タレカコレ主人公ナリト云フ、(中略)故ニイツレヲ主人公ト定ムヘキナラヌ所ヲ云也、(中略)趙州ヲ本トシテ、諸仏ヲ末トスヘキニアラス、諸仏ヲ本トシテ、趙州ヲ末トスヘカラサル所ヲ、タレカコレ主人公トハイハルル也、所詮誰モ皆主人公ノ道理ナルヘシ、(聞書 二・六一頁上)

「たれかこれ主人公なり」を、「誰モ皆主人公」と解している。これは、これまでの一慣した疑問詞の解釈である「いかなるも」の解釈に同じである。

(二) 疑問の助詞の用例

(1) 也未・也無

「……也未」も「……也無」も、肯定・否定をはっきり尋ねる疑問の助詞である。しかし『御抄』は、これをも疑問とは取っていない。

(a) また黄檗、合作箇什麼と問著せんとき、摸索得面皮也未といふべし、また備脱野狐身也未といふべし、また備答他学人不落因果也未といふべし。(大修行 五五〇頁)

未ノ詞モ即不中ノ儀ナルヘシ、摸索得ノ理モアルヘシ、摸索也未ノ道理モアルヘシ、所詮彼モ是非ニ徳失浅深軽重ヘシ、大修行ノ上ノ理ナリ、(中略)其ヲ不落因果也未ト云ハ、落不落ヲ超越シタル詞ナリ未ノ詞如前云、不審ノ詞ニアラサルヘシ、(抄 二・四七四頁下)

(b) 曹谿古仏、問僧云、「還仮修証也無。」僧云、「修証不無、染汚即不レ得。」(自証三昧 五五二頁)

不審ノ詞カトモ聞ク、但非爾歟、説似一物即不中ト心得テ後、

参三六祖タリシトキ、還仮修証也無トアリ、此修証カラストモカルトモ云義共ニアルヘシ、是則即不中ノ義ニアタルナリ、(抄 二・四八二頁下)

(a) では「未」の詞も即不中の義であるとして、「摸索得面皮也未」には、「摸索得」と「摸索也未」の二つの道理があると述べている。同様に(b)においても、「還仮修証也無」には、「修証を仮る」と「修証を仮らず」との二義があるとしている。本来は肯定か否定のどちらか一方の選択を求める疑問文であるが、そのどちらかを選択するのではなく、どちらも(いかなるも)あるというように解している。

(2) や

係助詞の「や」は、問かけ・疑問を表わす。この用例は次の如くである。

これらすでに心なり。内なりとやせん、外なりとやせん。来なりとやせん、去なりとやせん。(身心学道 三七頁)

是等ノ心、内外来去何トモ難レ定、又何ニモアタルヘシ、是什物恁麼来、説似一物即不中ノ道理ナルヘシ、(抄 一・一二五頁上)

「……とやせん、……とやせん、……」と、疑問が投げかけられているが、『御抄』は、「内外来去何トモ難定、又何ニモアタルヘシ」と述べている。内或は外というように定めることができないから、断定ではなく疑問の表現が用いられているのであろう。そのように定めることができないから「何

ニモアタルヘシ」と言われる。「何ニモアタル」とは、「いかなるも」ということであり、疑問詞の場合には、そのことば自体に「いかなるも」の意味を持たせて解釈してきたのであるが、疑問の助詞においては、「……とやせん、……とやせん」と、多くのものを列記することによって、「いかなるも」の意味を表わそうとされていると考えられる。

(3) か・や

終助詞の「か」「や」も疑問を表わすことばである。

(a)これは玄沙と同條出すれども、玄沙に同條入せざる一路もあるべしといへども、火焰の諸仏なるか、諸仏を火焰とせるか。(行仏威儀 五七頁)

火焰諸仏無_ニ各別義_ニユヘニ、火焰ノ諸仏ナルカ、諸仏ヲ火焰トセルカトウケラルルナリ、イツレニモアタリタル義也、(抄一・一八一頁下)

(b)一著落在に藏身露角なるか。大慮而解なるか、老思而知なるか。一類明珠なるか、一大藏教なるか。一條拄杖なるか、一枚面目なるか、三十年後なるか、一念万年なるか。(行仏威儀 五二頁〜五三頁)

是等モ歟ノ字ニ付テハ、疑カト覚エタレトモ非_レ爾、即不中ノ道理ナルヘシ、(抄 一・一六九頁下)

(c)造作より牆壁を出現せしむるか、牆壁より造作を出現せしむるか。造作か、造作にあらざるか、有情なりとやせん、無情なりや、現前すや、不現前なりや。(古仏心 八〇頁)

アラサルカアラサルカトアリ、例ノ皆此道理アルヘキユヘニ、

『御抄』の『正法眼蔵』解釈(伊藤)

カカトウケラルルナリ、是即不中ノ義也、(抄 一・二一六頁下) 「……か、……か、……」と繰り返して使われているが、疑問文ではなく、「イツレモアタリタル義也」「例ノ皆此道理アルヘキユヘニ、カカトウケラルルナリ」とあるように、先の「……とやせん」と同様に解されている。(c)には、「か」の他に、先に挙げた係助詞の「や」も用いられており、そのことはより明らかである。その他、終助詞の「や」も用いられているが、これも同じ働きをしている。

以上のように、『御抄』は、疑問詞或は疑問の助詞を、疑問を表わすことばとは解さないで、一貫して「いかなるも」の意味に解している。疑問詞の多くは、いかなるものも一法に撰される、或はいかなるものも一法の展開であるという表現の場合に用いられるが、疑問の助詞は、いかなるものもすべて肯定されるという表現の時に多く用いられていると言える。このような『御抄』の解釈を成り立たせるのに大きな影響を与えていると思われることばに、「是什麼物恁麼来」「説似一物即不中」があるから、このことばの意味を、次に考えてみることにしたい。

三 六祖と懷讓の問答

先の用例中からも明らかのように、疑問詞や疑問の助詞を

含んだ『正法眼蔵』の本文が『御抄』では、「是什麼物恁麼来」「説似一物即不中」の語によって、しばしば説明されている。このような『御抄』の解釈が、『正法眼蔵』の正しい解釈、即ち道元禅師の意図にかなったものであるかどうかは今別にして、疑問詞や疑問の助詞に対する『御抄』の解釈を知る上では、この二つのことばの意味を明らかにしておくなくてはならない。

この二つのことばは、六祖慧能と南嶽懷讓との問答にあり、『正法眼蔵』の遍参の巻には、次のように示されている。

南嶽大慧禅師、はじめて曹谿古仏に参ずるに、古仏いはく、「是甚麼物恁麼来。」この泥彈子を遍参すること、始終八年なり。末上に遍参する一著子を古仏に白してまうさく、「懷讓会得当初来时、和尚接懷讓、是甚麼物恁麼来」とちなみに曹谿古仏道、「爾作麼生会。」ときに大慧まうさく、「説似一物即不中。」（四八九頁）

我々は、この問答をどのように理解したならばよいであろうか。まず懷讓が六祖に始めて参じたときに、六祖が、「是什麼物恁麼来」（何ものがこのように来たのか）と尋ねたのであるが、「什麼物」はどのようなことを表わしているのだろうか。「このように来たのはだれか」と名前を尋ねているのではない。答えを得るのに八年もの遍参を要したのであるから、⁽¹⁰⁾「什麼物」は重要な意味を含んだ語であると考えられる。「このように来たのは何ものなのか」——これはまさに、「おまえとは何なのか」ということではないであろうか。問

われた懷讓が、これを自分の問題として受けとめれば、「自己とは何なのか」ということになる。仏道の中心課題である自己の究明がなされているかどうか、それを六祖は懷讓に問うたのではなからうか。（後に述べるが、これは単なる問ではなく、問がそのまま答となっているのであるが。）

ここで、「是什麼物恁麼来」について述べられている恁麼の巻とその『抄』によって、このことばの意味を考えてみることにしたい。そこには次のように説かれている。

曹谿山大鑑禅師、ちなみに南嶽大慧禅師にしめすにいはく、是什麼物恁麼来。この道は、恁麼はこれ不疑なり、不会なるがゆゑに是什麼物なるがゆゑに、万物まことにならず什麼物なると参究すべし。一物まことにならず什麼物なると参究すべし。什麼物は疑著にはあらざるなり、恁麼来なり。（一六八頁）

此六祖ノ御詞ノ、是什麼物恁麼来ヲ、不審ノ詞トノミ思習ハシタリ、非レ爾只法ノ道理ヲ被示也、一切ノ諸法只是、是什麼物恁麼来ノ道理ノ外不レ可有故、恁麼ハコレ不疑也、不会ナリトハアル也、万法ノ理是什麼物ナルユヘニ、万物マコトニ必是什麼物ナルト可ニ参究トハアルナリ、（抄 一・三八〇頁下ノ三八一頁上）

「恁麼」は、よく疑問詞として解釈されるが、⁽¹¹⁾本来は「この（その）ように」ということであって、「如是」の意味である。⁽¹²⁾この「恁麼」が「不疑」であり、「不会」であるというのは、疑う余地のない、我々の理解を起えたもの、我々の認

識では捉えられないものであることを表わしている。認識では捉えられないものが何であるかを明らかにするためには、先ず、我々の認識はいかにしてなされるかを説明しておかなければならない。

我々は自己（主観）と他者（客観）とを異なるものとし、主観客観対立の下でもの（方法）を認識する。しかし、本来自己は主観として、方法は客観として存在するものではなく、分別の働きによって異なるものとして我々が捉えているにすぎない。本来主観というものもありえないし、客観というものもありえない。自己も方法も、その存在している事実からするならば、何ら差別はなく同一である。だが、我々は常に分別を通して自己とは異なるもの、主観に対する客観としてしかものを捉えることができない。このように、分別を通して捉えられたものは方法そのものではない。言い換えれば、方法そのものを我々は認識し得ないということである。⁽¹³⁾

これで明らかであろう。疑う余地のない、我々の認識では捉えられないもの、それは方法そのものであった。この方法のありのままの姿（如是相）を「恁麼」は表わしていると言えらる。それ故、「恁麼来」（このように来た）とは、このように来たもの、即ち自己（方法）のありのままの姿を表わしたことばであると言えらる。

この「恁麼」が「是什麼物なるがゆえに、万物まことにか

ならず什麼物なると参究すべし」と説かれている。方法そのもの、それを「什麼物」と『正法眼蔵』では述べており、『抄』も「万物ノ理是什麼物ナルユヘニ」と釈している。方法のありのままの姿、それは主観客観対立の下では認識することができなかつた。このことは、言語によって方法そのものは表現し得ないということである。なぜならば、言語によって表現されたものは、既に分別を通して捉えられたものであるから、ものそのものではない。方法そのものが言語によって表現され得ないということは、換言すれば、自己そのものも言語によって表現され得ないことである。ここで用いられている「什麼物」は、「自己とは何か」と問いかけていると同時に、そのように表現できない自己を示したことばであると言えらる。何故ならば、言語によって表現し得ない自己（方法）を語るとするならば、「なにもの」（什麼物）としか言いようがないからである。このように解するならば、「什麼物」は既に疑問を表わすのではなく、自己即ち方法そのものを表わしているのであるから、「什麼物は疑著にあらざるなり」と言うことができる。

六祖のことばに対して懷讓は、「説似一物即不中」と答えている。「一物」とは、「一物まことにかならず什麼物なると参究すべし」とあるから、方法そのものをいうのであろう。方法（自己）そのものを我々は認識できないから、それを言語

で説明しようとする、即ち分別を通してそれを捉えようとするならば、そのときには既に的をはずれてしまっており、万法（自己）そのものを捉えてはいないということになる。

以上のように、六祖は、万法のありのままの姿というものは言語によって表現され得るものではないから、「什麼物」としか言いようがなく、「什麼物」こそが万法のありのままの姿（恁麼来）であると、「是什麼物恁麼来」という疑問の形でもって示した。これに対して懐讓も、「説似一物即不中」、言語によって表現したとしても、それはありのままの姿を捉えたことにはならないと、六祖に答えている。これはまさに問と答ではなく、問の中に既に答があり、また六祖の問に対する懐讓の答ではなく、六祖のことばと同一内容を懐讓が「説似一物即不中」という自分のことばで表わしたものとと言える。

『御抄』が疑問詞や疑問の助詞を含んだ文を註釈する場合に、しばしば「是什麼物恁麼来」や「説似一物即不中」ということばを用いて註釈しているのは、以上述べてきたような意味を表わさんとしているものと思われる。では、このことと、『御抄』が「いかなるも」の意味に解するのは、どのような関係にあるのであろうか。次にその点について考察することにした。

四 疑問詞と疑問の助詞の意味するもの

疑問詞を『御抄』は疑問の意味とは解さないで、「いかなるも」の意味に解していることは既に幾度も述べた通りである。すべてがそのものだけである、即ちいかなるも一法に撰せられるという表現の場合、或は反対に、いかなるものにも展開するという場合にも用いられているが、どの場合も、「いかなるも」の意味に解している。

他方、疑問を表わす助詞では、「也未」「也無」という是非選択の場合であればそのどちらも、「……か、……か、……か」というように多くのものを挙げて問う表現の場合には、それらどれもいうことを表わしていた。これは、疑問詞が「いかなるも」の意味に解されたのと同じである。疑問詞は、ことば自体に疑問の意味を含んでいるから、疑問詞を「いかなるも」の意味に解するとするならば、そのことば自体にそのような意味が含まれていることになる。しかし、助詞は疑問であることを表わすが、それ自体において、「いかなるも」の意味を含むことはできない。そこで、文末に付いて疑問文を作り、列記せられたところの疑問文を疑問文とは取らないで、肯定文と解することによって、列記せられたことがすべて肯定され、疑問詞を用いたと同様に「いかなるも」の意味を表わすことになる。

このように、疑問詞も疑問の助詞も「いかなるも」の意味を表わすと『御抄』は解するのであるが、何故そのような解釈が成り立つのであろうか。

我々は、先に、『御抄』が疑問詞や疑問の助詞を、「是什麼物恁麼来」や「説似一物即不中」を用いて註釈している点に注目して、これらの意味を明らかにした。そこにおいて「什麼」は、言語によって表現され得ないもの、即ち自己(方法)そのもののありのままの姿(恁麼来)を表わしていた。そのように、我々の分別によっては捉えることのできない自己(方法)そのものを「是什麼物恁麼来」は表わしており、「説似一物即不中」も同じ意味であった。これら二つのことばと、他の疑問詞・疑問の助詞とが同義語であるとする『御抄』の立場からすれば、疑問詞等も同様に解釈しなければならぬ。即ち自己(方法)そのものを疑問詞が表わしているといえる。本来自己と他者とは差別もなく平等である。なぜならば、自己と他者とを差別して捉えるのは我々の分別の働きにすぎないのであって、その存在している事実の上からは、なんら異なるものではなく同一だからである。これは自己と方法との間のみに限らない。一法と一法とにおいても同じである。⁽¹⁴⁾ そのように、いかなるも、平等無差別であるから、先の用例で見たように、方法中から一法(A)をとりあげて、いかなるもAであるといってもよいし、BもCもDも、いかなるもAの

展開にほかならないと言うこともできる。表現は異なっても、それは一法(A)の究尽ということを表わしているにすぎない。また疑問の助詞によって表わされた疑問文においては、列記せられた相對するものをも含めたすべてが肯定文として扱われるのも、同じく諸法を差別的に見ないで、いかなるも、諸法の実相として如実に捉えられているからであらう。⁽¹⁵⁾ 以上のように、『御抄』が疑問詞を「いかなるも」の意味に、また疑問の助詞による疑問文をすべて肯定文として解して、「いかなるも」の意味に取るのも、それらを「是什麼物恁麼来」「説似一物即不中」の意味に解していることによる。即ち、『御抄』の解釈は、恁麼の卷における「什麼物」の道元禅師の解釈を、他の疑問詞の解釈にも及ぼしたものであると言える。

五 おわりに

以上で『御抄』が『正法眼蔵』中の疑問詞や疑問の助詞を、いかに解釈しているのかは明らかになったが、ここに問題として残るのは、果して道元禅師自身もそのような解釈をされていたかどうかである。結論から先に述べれば、禅師自身もそのような解釈をされたのではないかと推測されるのである。その理由を次に述べる。

第一は、先にも引用した『正法眼蔵』の本文に、

有何所表を問著にあらざるとききて参学すべし。（古鏡 一七六頁）とあり、「有何所表」は明らかに疑問文であるが、問ではないというように学ばなくてはならないと、禪師自身が述べられている。

第二に、

たれかこれ主人公なり。（栢樹子 三五〇頁）

という文があるが、「たれか」に対する結びとして、「なり」は不適當である。『聞書』もこの点を、

タレカコレ主人公ナリト云フ、誰カトイフカノ字ニハ、終ノナリノ字ハ、カキアハヌヤウニキユレトモ、能案之ニ、道理相応ス、（聞書 二・六一頁上）

と述べている。しかし「カキアハヌヤウニキユレトモ、能案之ニ、道理相応ス」というのは、既に述べたように、『聞書』では、「たれか」を「誰も皆」の意味に解しているからである。そのように解するならば、この文は、

誰も皆これ主人公なり

となつて、なんら合わないことはない。ということとは、禪師自身も、『聞書』が解するような意味を表わさんと意図して「たれかこれ主人公なり」と説かれたのではなからうか。「たれか」を「誰も皆」と解するなどは、直接禪師の説法を聴いた者でなくては言えない解釈であらう。

第三に、『聞書』に、

世間ニハイカナルカコレ仏ト読テ、仏ヲ不審スルト心得、此宗門

ニハヤカテ以問為答（空花聞書 一・三三〇頁上）

とある点である。世間では問を問として受け取るが、「此宗門」では、問を即ち答とすると説かれている。「此宗門」とあるからには、このような解釈は、決して詮慧一人の解釈ではない。むしろ、禪師の説法を親しく拝聴したであろう詮慧が述べているのであるから、それは即ち道元禪師の解釈であると言えるのではなからうか。

また、先に述べたように「是什麼物恁麼來」の「什麼物」は疑問ではないとされている点からも、道元禪師自身に、疑問詞を疑問詞とは取らない解釈があったものと思われる。

以上、『御抄』は、疑問詞や、疑問の助詞による疑問文を肯定文と解することによって、「いかなるも」の意味に解しているが、それは道元禪師の「是什麼物恁麼來」「説似一物即不中」についての解釈を普遍させたものであると言える。しかし、そのような解釈も、『御抄』独自のものではなく、道元禪師がそのように解釈されていたのを、『御抄』がより明確にしたものと思われる。

(1) 平仮名で書かれていても、語録等からの引用を道元禪師が平仮名に書き下されたものである場合には、漢語に戻すことができるが、禪師自身のことばである場合にはそれが困難である。ここでは『却退一字参』の漢訳された本文を参考に、相当する漢語を当てはめた。この点については、後の用例中において註記する。

(2) 汝喚^ニ什麼^ニ為^ニ人人、喚^ニ什麼^ニ為^ニ光明、(『正法眼藏註解全書』(以下『註全』と略す)第五卷三〇八頁)

(3) 祇今牆壁瓦礫在^ニ什麼^ニ處、応^ニ參詳看、(『註全』第八卷九二頁)

(4) 『抄』は「仏性ナルヘキカ、法性ナルヘキカ……」と疑問を投げかけているのであって、すべてにあたるとは言っていないが、同様の表現が前の用例(e)にあり、そこでは「何義ニモアタル」と述べている。また、疑問の助詞の「か」の項で述べるが、「……か、……か、……」と繰り返す表現の場合には、終助詞「か」は疑問ではなく肯定を表わすから、このようなことが言えるのである。

(5) 如何是海。(同頁の本文中にあり)

(6) 如何是仏光、(『註全』第五卷三〇五頁)

(7) 如何是祖師西來意。(栢樹子 三五〇頁)

(8) 如何是生、如何是死(後略)(『註全』第三卷五一三頁)

(9) 誰是主人公也、(『註全』第五卷二六三頁)

(10) 但し、これは『天聖広燈錄』(統藏一三五・三二五C)によっており(鏡島元隆著『道元禪師と引用經典・語録の研究』二五一頁)、『景德伝燈録』では八年間の遍参はなく、すぐに懐讓は「説似一物即不中」と答えている。史実はどちらであるにしても、禪師が八年間の遍参を要したとする『広燈録』の方を採られたのは、「是什麼物恁麼來」という六祖の間が、いかに重要な問であるのかを表わしていると言える。

(11) 日本古典文学大系所収の『正法眼藏』の註は、「是什麼物恁麼來」を「何者がどうやって来たか」とするが(一〇九頁)

『御抄』の『正法眼藏』解釈(伊藤)

これは誤りである。無着道忠の『葛藤語箋』(第四卷)も、恁麼と什麼とを同じとし、清の翟灝の撰になる『通俗篇・語辞』も、恁麼を疑問詞とするが、「恁」を疑問詞とするのはのちの誤用で、発生期には「恁」に疑問の用法はない(志村良治「恁麼」考)『東方学』第三九輯所収 一〇頁)。「日本の禅家のなかに「与麼」と「恁麼」を疑問詞として扱って「甚麼」(什麼)と同義に解する人があるが、誤りである。」(入矢義高「禅語つれづれ」『講座禅』月報三所収)

(12) 志村良治前掲論文 一〇頁。また『抄』にも「恁麼ト云事、(中略)所詮カクノ如シト云詞也。」(恁麼抄 一・三七〇頁上)とある。

(13) 拙稿「一方を証するとき一方はくらしの論理」(『駒沢大 学仏教学部論集』第七号所収 一六二〜一六三頁)参照。

(14) 前掲拙稿 一六九頁。

(15) 疑問詞に「いかなるも」の意味を持たせて解釈することが、ことばの持つ本来の意味から言って正しいかどうか問題であろう。ここで現代中国語を見てみると、「什麼」には

①何 ②どんな ③何でも、どんなものでも、あらゆるものを指す指示代詞(後略)(『中日大辞典』二二八五頁右)

というように、①②の疑問の意味のほかに、③のような意味があるが、これはまさに、『御抄』で言うところの「いかなるも」の意味である。しかしこれは現代における意味であって、それぞれの問答がなされた当時、或は道元禪師入宋当時によい意味があったかどうかは不明である。だが、例えば「底」は疑問詞として「なに」の意味を持つが、そのほかに次のような

用例もあることが指摘されている。

底処双飛燕（范成大・双燕）

は「是処」に同じ、「いたるところ」と汎称詞として用いられている。（志村良治「甚麼の成立——中古中国語における疑問詞の系譜——」『東北大学文学部研究年報』第一八号所収 二〇七頁）

范成大は宋代の人物であるが、当時既に疑問詞が汎称詞として使われることがあったようである。ただしこれは、「底」であって「什麼」等の疑問詞ではない。疑問詞を「いかなるもの」の意味に解する解釈は、道元禪師の説法を直接に聴いた詮慧の『聞書』の中にも見られるから、次の項において述べるが、禪師自身がそのような解釈をされていたであろうことは推測できる。しかし、筆者には、道元禪師の入宋或はそれ以前に中国で、『正法眼蔵』中に見られる疑問詞が、汎称詞として「いかなるもの」の意味に解されていたということを証明するだけの資料はない。だが、「疑問は一般的に不定と共通する」（太田辰夫著『中国語歴史文法』一五一頁）と言えるから、これはあくまでも推論であるが、禪師の入宋当時、中国において、疑問詞が汎称詞として解釈されることがあったのではなからうか。

本学兼任講師中村信幸氏より、中国語文法関係の文献等の紹介と御教示を得た。記して感謝の意を表する次第であります。

（一九七七・七・一四）